「生活とは、『生』きていることを『活』かす」こと

福祉関係の最新ニュース配信のＨＰに「長時間あんしん尿とりパッド新発売」の記事の開発意図の宣伝字句には愕然とした。

記事の概要は、「一日のおむつ交換回数軽減を実現し、排泄ケアにかける時間が減り、その分の時間を他の介護ケアや自分のことに充てることができ、介護を受ける本人にも介護する人にも、ゆとりある介護生活を送ってもらいたい」ために、「約 4 回分のおしっこを吸収する長時間あんしん尿とりパッドを新発売」。

確かに、頻尿・尿漏れ等での「肌トラブル」を起こす可能性を軽減すべく、材質的にも機能性の高い尿とりパッドを開発の意図は望ましい企業努力と理解できるが、「排泄ケアにかける時間が減らし」とは、誰のゆとりある生活のためなのか。

摂食、排泄、清潔の支援は介護の三基本であり、その基本の介護姿勢を疎かに考えて、ゆとりある生活とはどういう生活なのか。

「『生活』とは、『生』きていることを『活』かす」こと。

よく「忙しいから…」と聞くが、それは「忙」の字の通り、「生きいることを活かそうとする」心を亡くしていることに他ならない。

排尿したい時に排尿でき、後始末できる（介護してもらう）ことこそ、尊厳であり、「自律」であり、そこからこそ、自己認知、自己形成、等のアイデンテイテイーが確立し、それが精神的にも「ゆとりある生活」、「生きていることを活かす」第一歩が踏み出せるのでないのか。

最も基本的なところを疎かにして、いくら「当事者の自己決定を優先・尊重する支援を！」等と宣わっても、絵空事に過ぎないと思う。

本人とて、「４回分大丈夫だから…」と排尿したことを意識しつつも後始末しない（介護してもらわない）で、精神的にゆとりある生活に向かうことはあり得るのだろうか。

介護側とて、本人からの排尿の意志表示があっても「４回分大丈夫だから…」と見過ごすのだろうか。そうした中に、ゆとりある生活への係わり合いは存在するのだろうか。

「おむつに排尿して気持ちよくないだろうなあ」と思い遣る心にこそ、福祉や介護の基本姿勢があるのでないだろうか。

当事者や子どもの目線からの最も基本的なところからの論議が疎かにされる、何だかハチャメチャな世相になって来ているように感じるのは、自分の思い過ぎなのだろうか。

阿部幸泰　　（2007 年 2 月 25 日　記）